

国際協力×写真

関西学院大学 1年 多島 優加

私は国際協力と写真をコラボさせたいと思う。今、若者の間でインスタグラムが流行しており、インスタ映えやフォトジェニックといった言葉があらゆるところで使われるようになってきている。インスタ映えするものは若者の間で注目を浴び、それがメディアに取り上げられることもしばしばある。そのようなことから、私は考えた。世界を魅力的に撮ることが国際協力に繋がるのではないかと。そして、未来の写真家が集う写真家専門学校などにも協力してもらい、海外で活動している様子を写真に収めてもらうなどし、国際ボランティアと連携させていったらよいのではないだろうか。私は小学生の頃から、写真を撮ることが好きだ。写真を見ていると、その場にいらなくてもその雰囲気を楽しむことができる。プロの写真家なら、なおさら臨場感が伝わってきてよい。「百聞は一見に如かず」という言葉がある。人から何度も聞くより、一度実際に自分の目で見るほうが確かであり、よく分かるという意味である。このことわざのように、長々と文章を書くより、一度自分の目で見たほうがイメージしやすいと思う。しかし、海外に行くことはそんなに簡単なことではない。学生は、勉強もしないといけないし、お金もないからだ。そこで、写真が必要なのだ。また、まだプロの写真家になっていない学生のうちから、学生をできる限りプロと同じように扱い、そして人々の役に立っていること、またプロとしてやっていく意識を学生に持たせることによって、自分は本当にこれになりたいんだ！！という意識を強く持たせることができ、学生にも非常に刺激のある経験になると思う。そして、その経験をきっかけとして、世界のことを撮りたいと思う学生が増加したら、より多くの写真が撮られることとなり、それらの写真が人々の目に触れる回数も増える。

さらに若者の利用者数が多いインスタグラムを使うことにより、高校生や大学生といった若者たちにも、より発展途上国のことを身近に感じてもらえる機会を作ることができると思う。また、撮った写真などを高校生や大学生に人気の雑誌で特集してもらったり、特集とはいかないまでも 1 ページを使わせてもらって広告を作るなどといったことをすると、興味を持つきっかけとなるのではないだろうか？写真を用いることで、ボランティアへ参加することの気軽さを出していけるのではないだろうか？また、そのような若者を対象としている雑誌に掲載する際には、同じくらいの年齢の子が活動している様子を中心に写真を撮るとよいと思う。大人だけではなく、実際に高校生や大学生といった年の近い人がこのよ

うな活動をしていることを知ると、親近感がわきやすいはずだ。

昔より現在はボランティアが若者にとって身近なものになっているのは事実だと思う。高校生であっても参加できるボランティアもあるし、大学生になると多くのボランティアサークルもある。また、2020年には東京オリンピックが開催され、ボランティアも注目されることが予想される。しかし、国際ボランティアというのは現時点の日本ではあまり親しみのないものである。だから、まずはボランティアというものが人々にとって、私たちが普段スーパーに行くのと同じぐらい身近なものになることが第一歩なのではないか。正直言って、日本人は発展途上国に対し、あまり興味がないと思う。私もそうであった。テレビで目にするのは先進国の番組が多く、自分で知ろうという意志がないとなかなか発展途上国のことを知ることができないと思う。イメージだけで止まってしまい、実情をあまり理解していないと思う。だからこそ、インスタグラムや雑誌といった若者に比較的親しみやすいものを通して、少しずつ世の中にボランティアを浸透させていけば、国際協力は促進されると私は考える。